

◆伊藤洋二 選 ～「誦んじたい俳句 88」～

鷹羽狩行(監修) 片山由美子(文) 石飛博光(書) 二〇〇五年 日本放送出版協会

羽子板の重きが嬉し突かですつ 長谷川かな女

手首を捏ねないゴルフスイングの練習として、羽子板を教材として使うとか。筆者も始めた頃は、毎週日曜日には練習を欠かさなかったが、不器用さは如何ともし難く、飛ばしたいという願望にクラブは応えてくれなかった。あの時、羽子板を知っていればと悔やまれる。「春ゴルフ無欲が嬉し打たで振る」。

わが墓を止り木とせよ春の鳥 中村苑子

ただ今、浪曲、廣澤虎造の「名古屋の御難」を練習中。♪旅行けばあああ 駿河の路にいい 茶のおうう香をりいい ここは名に負う東海道 名所古跡の多いところおおお♪ 鶯も鳴き方を練習するが、ウグイス嬢は「チャッチャッ」の初級を卒業すると、「ケキョケキョ」の中級を経て、「ホー法華経」を完成する。「わが節をお手本とせよ経読鳥」。

せせらぎや駆けだしさうに土筆生ふ 秋元不死男

子どもの頃よく鮒を釣った池に二つの樋門があった。「みよとび」と呼ばれていたが、それが、「夫婦樋」のことだと知ったのは随分、後になってからである。今は、石組みの二つの樋門は跡形も無く、池には、ブラックバスが幅を利かせている。通学路だった土手には確か土筆があったが、コンクリートに覆われてしまった。用水整備や洪水対策の必要は認めるものの、故郷は、もはや記憶の中だけに。

ねむりても旅の花火の胸にひらく 大野林火

旅の一座、その名は「花火」。普段は開会式や遊園地での営業に、夏場は各地を巡演する。お盆には一転、七世の父母を供養する、迎え火や送り火として仏さまのお手伝いをするこも。速射連発花火よりも、真っ赤な火球が藺草(いぐさ)の先にしがみ付く線香花火の方が筆者の好み。「この世からあの世から観る遠花火」。

そら豆はまことに青き味したり

細見綾子

そら豆は、さやが空を向いてつくので「空豆」や、さやの形が蚕に似ていることから「蚕豆」の字があてられる。筆者の住む当地では「コヤマメ（高野豆）」とも云う。日本へは八世紀末に遣唐使の船に乗って渡来したそうで、その頃、お大師さんが高野山を開創されたので高野豆と云うのかも。そら豆を塩茹でする際の、水・塩・酒の黄金比率は、一升:八匁:一合とか。今宵は空を見ながら、一寸一杯。

空澄めば飛んで来て咲くよ曼珠沙華 及川 貞

我が家に飛んでくるものといえば燕だが、最近、心配な事がある。周辺に新しい住宅が増え、その屋根には必ず太陽光発電パネルが敷かれている。眩しくて我が家を見失うのではないか。サングラスを買ってやりたい。

あせるまじ冬木を切れば芯の紅

香西照雄

春野菜のために、畑打の邪魔になる金柑の剪定に挑戦したのだが、植えっぱなし、放ったらかしの報いか棘に刺された。実を採って後は知らん顔だったなあ。「急ぐべし我欲を切れば真の春」。

◆日根野聖子 選 ～山田貴世『喜神』より～

どの顔も幸せそうに初みくじ

初詣では、必ずお守りを買って、おみくじを引く。どうか良い年になりますように。神様からの良い知らせが書かれていますように。おみくじの標準的な吉凶の割合は、「吉」対「凶」が七対三で、吉の七割のうち「大吉」は一六%とか。お正月は、大吉がちょっと多めになるよう、発注、製造されるらしい。

手鏡の芯まで磨く水の秋

テレビを観ない日があっても、鏡を見ない日は無い。特に女性にとっては、テレビ画面よりも鏡の方が大切。“いつも綺麗ね”とか“全然変わらないわねえ”などと、思ってもない嘘をつく女友達よりも、真実を正直に伝えてくれる鏡こそが真の友達。鏡の眼を曇らせることがあってはならないのだ。

相応のくらし二分の一大根

最近は、様々な野菜が、二分の一どころか、すぐ調理できるサイズにカット、スライスされ、小分けされて棚に並ぶ。最初は、栄養や衛生面が気になって抵抗していたが、一度買ってみると便利で経済的。「便利さに慣れてズボラにカット野菜」。

羽蟻の夜夫は無言を楯とせり

相手は最終手段に出ましたね。貝になられては困りました。これは長期戦の様相です。塩水につけておくか、茹でるしかありませんね。

意外にも饒舌南部秋風鈴

飯田蛇笏の「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり」は名句とされているが、何度読んでも良さが分からない。何度読んでも、「だから何？」、「それからどうなる？」という疑問が湧いてしまう。この句の方が、例えば強面の名優が意外とおしゃべりだったみたいな可笑しさがあるって名句だと思う。